

【書籍紹介】

まさか？俺ががんかよ！

西谷 源展(44 回生)

本会会員で第 36 回卒業の湯ノ口武司氏の著書が刊行されました。書名は「まさか？俺ががんかよ！」である。氏によれば平成 19 年 6 月から 12 月までの半年間に 24 回の通院治療を行った。その間「がんではなく心配しなくても良い」と医師から説明を受けていたが、一向に良くならないため自ら細胞診を申しでた。その結果、喉頭がん T2 との告知を受けた。この時に思わず口を吐いた言葉が・・・まさか？俺ががんかよ！であったのだろうと想像できる。

これから始まる闘病生活と精神的な葛藤が細かに記述されている。それはベテランの診療放射線技師が、がん患者として見た現実ではないだろうか。

全体が 11 章から構成されており、がん患者としての苦悩が記述されている。

- 第 1 章 まさか？俺ががんかよ！
- 第 2 章 入院生活、検査及び検査入院
- 第 3 章 告知の是非
- 第 4 章 再発・転移の不安
- 第 5 章 抗がん剤は効くのか、効かないのか？
- 第 6 章 死より怖い？抗がん剤の副作用
- 第 7 章 カルテの開示
- 第 8 章 生あるものは必ず死ぬ
- 第 9 章 医師不信の原因は
- 第 10 章 私が末期がんになったら
- 第 11 章 身辺整理

執筆にあたって読み込まれた癌に関する図書は 200 冊を超え、決して氏の独りよがりの意見ではなく、詳細な事実に裏づけされた内容となっている。

日本人の高齢者の死因上位ががんである現実を見ると、私たち診療放射線技師は是非がん患者の心情・苦悩を知ってほしいと著者は述べている。

後日、メールにて次のようなメッセージをいただいたので紹介したい。

50 年近く医療に携わり「箸にも棒にもかからない技師」を多く見てきました。「診療放射線技師は医者に近い存在」と錯覚している人がよくいます。この感覚の錯覚に陥りやすいのは卒業して 5～6 年以内の人に見かけます。「診療放射線技師は患者さんの近くにおいて、最高の技術で情報を提供し、放射線治療をする」ことではなりません。そのためには、学問・技術を研鑽しなければならないのです。「私たちは『診療放射線技師』です」、自覚しなければなりません。

氏の長年の放射線技師として、医療人としての心構えを伺い知ることができるメールであった。是非会員の皆様にも一読していただきたい著書である。

お求めはお近くの書店にてお願いします。

『まさか？俺ががんかよ！』

湯ノ口 武司 著

出版 文芸社 定価 1,500 円+ 税

以上

* 通巻 207 号 2013 年 4 月 10 日発行(H25-No.1)より